

現代批評の動向を探る

—— Miller と Kermode の Conrad 論分析を通じて ——

西田 みさお

J. Hillis Miller による *Fiction and Repetition* (1982) の第 2 章 “*Lord Jim: Repetition as Subversion of Organic Form*” と、W.J.T. Mitchell 編集の *On Narrative* (1981) に収められた Frank Kermode の “*Secrets and Narrative Sequence*” は、ともに Joseph Conrad (1857-1924) の作品を扱った批評である。作家が共通であるとはいえ、それぞれ *Lord Jim* (1900), *Under Western Eyes* (1911) という異なる作品を扱ったこのふたつの批評を、これから行うようなやり方で同時に分析していくのは、多少強引であるように思われるかもしれない。しかし、両者に偶然の一致という理由だけでは片付けられない類似点があることも確かであり、さらに、これらの批評が、小説の内容や意味よりむしろ、小説の読み方や言葉の “texture” に焦点をあてていることを考えれば、ここで両者を比較しつつ同時にとりあげることは必ずしも不適當ではあるまい。それ故、以下においては、現代の批評の動向を探りながら、両者の類似点、類似点のうちの相異点、あるいは相異点のうちの類似点、そして相異点等を取りあげ、それについて論じていきたいと思っている。

まず、Miller と Kermode の論を構成する共通の出発点として、両者がともに “linear sequence” に基づく安易な意味の決定を避けているということがある。

Miller はその序論の “Two Forms of Repetition” において “This book is an explanation of some of the ways [recurrences] work to generate meaning or to inhibit the too easy determination of a meaning based on the linear

sequence of the story” (2) と述べ、物語の “linear sequence” ではなく、反復の作用を通じて小説を解釈していこうとする彼の態度を明らかにしている。また、*Lord Jim* を扱った章は序論のすぐ次に置かれているのだが、その小説自体は彼が選んだ七つの小説——その時代区分はヴィクトリア朝初期から、第二次世界大戦前夜にいたるのだが——その七つの小説の書かれた年代から考えていくと、ちょうど中間あたりに位置するというのである。そして、その中間に位置する小説をわざわざ最初にもってきたことに関する Miller の釈明のうちにも、“linear sequence” をあえて避けようとした彼の立場がうかがわれる。彼はこう述べる。

[The seven novels interpreted here] do not make a historical “progression,” or a “degradation,” either. My chapters are attempts at readings, not attempts at the construction of a history, unless the demonstration of a movement in place or a series of nonprogressive variations is considered to be a form of history. (23)

このように、Miller は、小説の中の “linear sequence” を彼の論の中心課題から除外することを主張すると同時に、*Fiction and Repetition* において取り扱う小説の順序を年代順に逆らって配置することによって、彼の論が歴史的な流れのうちにとらえられていないことをより明確に示そうとしたのであろう。

ところで、今引用した Miller の文の中に “the demonstration of a movement in place or a series of nonprogressive variations” という言葉があり、これこそ Miller が小説を構成するものとして主張しようとしたことであるように思われるが、これはまた Kermode が Keats の “Ode on a Grecian Urn” の内に見たものとも一致する。この詩は、ギリシャの壺の表面に描かれた “events” をもとにして書かれたものであり、そこには一見 “mythos” (“motif”), “ethos” (“character”), あるいは “dianoia” (“thought”) といっ

た物語の構成要素が存在し、“plot”を構成しているように思われる。しかし、Kermodeによれば、この物語には実際には“intelligible sequence”が欠けており、それにもかかわらず、読者は詩人に従って、“sequenceless”な世界に“sequence”を見出そうとする誤ちを犯してしまうということである。(80)

この“Ode on an Grecian Urn”の例は、後に展開するKermodeの論を極端にあらわしたものであるように思える。というのは、ここで槍玉に挙げられているのは“sequence”のない世界に“sequence”を見出そうとする読者の不毛の行為であり、この“sequence”は実は全く存在しないものであるのだが、後の部分では、彼は小説の“sequence”そのものの存在を否定しているわけではなく、従来の批評家たちが“sequence”を重視するあまり、その“sequence”と相容れないもの、“sequence”に敵対するもの——Kermodeはこれを“secrets”という言葉であらわしているが——そういったものを無視したり、無視しないまでも無理にこじつけてしまう傾向にあるということを指摘しているからである。

例えば、Albert Guerardは、一般にスタンダードな批評だと考えられている彼の*Conrad the Novelist* (1958)の中で、*Under Western Eyes*において作家が最も関心をいただいているのは、主人公Razumovの精神病理学であると述べ、Kermodeが“secrets”とみなした“phantom”“ghost”といった頻出する言葉をも、Razumovの心理的障害に言及することによって片付けており、他にも、小説の中の悪魔的要素をとり払うために、Conradの原案を持ち出してきたり、あるいはそれに全く触れずにすませているような箇所もあるということである。また、物語の順序が入れかわっていることも、偏った見方をするばかりでなく全知でないふりをする一観察者が語り手であることも、小説の利点だと主張するGuerardにとって、Conradの控え目で合理的な散文は、思想のドラマや、裏切りや救済のドラマを妨げるものではないらしい。このように、Guerardのようなよい批評家

たちは、言葉が自分の邪魔になるのを避けようとするものであると Kermode は述べている。(86-88)

こうして見てくると、Miller と Kermode の “sequence” に対する見解に微妙なずれがあることがわかってくるだろう。Miller は先程も言ったように、彼の論から “linear sequence” を除外し、小説をむしろ “a movement in place or a series of nonprogressive varieties” という点から解釈しようとした。それに反し、Kermode は必ずしも “sequence” を除去しようとしたわけではなく、“sequence” を重視するあまり従来見落とされていた “secrets” の部分にも読者の目を向けさせようとしたのである。このことは、この論における彼のテーマが “the conflict between narrative sequence (or whatever it is that creates the ‘illusion of narrative sequence’) and what [he] shall loosely, but with pregnant intention, call ‘secrets’” (81) であると Kermode 自身述べていることから明らかである。

また、Kermode はこれに関してひとつの提案をしているのだが、それは小説を “two intertwined processes, the presentation of a fable and its progressive interpretation (which of course alters it)” (82) の所産とみなすことである。このうち、最初のプロセスは、“sequence” を有するものと考えられるが、それは “clarity” や “propriety” に向かい、二番目のプロセスは、“secrecy” や “secrets” を覆い隠す “distortions” に向かうと彼は述べている。

興味深いのは、Miller もまた、Kermode と同じような前提をたてていることである。Miller は反復を通して小説を解釈すると主張していたが、そうした反復は “the contradictory intertwining of the two kinds of repetition” (4) から形成されるというのである。その二種類の反復を説明するために、Miller はまず Gilles Deleuze を引用し、Plato 的な反復と Nietzsche 的な反復について述べていく。Plato 的な反復とは、その根底に確固とした原型をいなくものであり、他のすべての例はこの原型の複写にす

ぎない。他方, Nietzsche 的反復とは, 差異に基づく世界を仮定するものであり, そこではおのおののものは, 本質的に他のものと異なっている。だが, この本質的な差異の存在に反し, 類似性が生じるとすれば, それは基盤となるべき原型をもたない幻影でしかない。(6) これら二種類の “grounded” “ungrounded” という反復は, 一見両立し難いように見えるが, Miller によれば, 一方の反復がもう一方から孤立して存在することはあり得ないということである。彼はこう述べる。

The relationship between the two forms of repetition defies the elementary principle of logic, the law of noncontradiction which says: Either A or not-A.” In all novels read here both forms of repetition are in one way or another affirmed as true, though they appear logically to contradict each other. It would appear that a repetitive chain must be either grounded or ungrounded. In my novels, however, . . . the repetitive series is presented as both grounded and ungrounded at once. (17)

Miller にとって, 二つの絡み合ったものとは, このように “grounded” “ungrounded” という二種類の反復であり, これらは矛盾しながらも共存する。一方, Kermode における二つの絡み合ったものとは, 先程述べた通り, “fable” とその “interpretation” であった。“fable” とは “propriety” を遵守した小説の “sequential” な部分であり, “interpretation” とは, “fable” の曲解であり, “secrets” を産出するものである。そうすると, Kermode の場合, “fable” と曲解された “fable” が一つの小説の中に共存するということになるが, この二つを共存させるには “fable” を解釈する第三者の介入が必要となるであろう。それは, 読者や作家であるかもしれないし, 登場人物や語り手であるかもしれない。

実際, *Lord Jim* においても, *Under Western Eyes* においても, 独自の語

り手が存在するわけであるが、Miller も Kermode もそれらの語り手が“unreliable”であるという点に関しては共通の見解を示している。しかし、これらの語り手の役割を、それぞれの論に従って分析すると、彼らの立場の相異が自ずと明らかになる。

Under Western Eyes の語り手である年老いた語学教師は、そのタイトルも示す通り、彼の西欧人の眼をもってして、青年 Razumov がロシア専制主義を背景にどんな運命をたどったのかを観察し、語っていく役割を担っている。この語学教師は、自分が、“dense’ medium”であると告げることによってロシア人に公平であろうとするような“clumsy device”であるのだが、その反面、一人称小説というのは、“eyewitness”の信頼性と話し言葉の“authority”を与えてくれるものである。このことは Conrad が“authority”を要求すると同時に放棄していることを示している。そして、“authority”をもつことは、“clearness”や“effect”に向かうことであり、それをもたないことは想像力の墮落に陥ってしまうことであった。(87)だが、こうすることによって、Conrad は同時にふたつの作業を一つの小説において遂行することができたのである。つまり、一般の読者たちのために“clearness”や“effect”を求めつつ、その裏では“interpretation”を追い続けていたのである。(87)

こうした中で、語り手の語学教師がはたした役割は、読者の目をそうした影の“interpretation”や“secrets”からそらすことであった。例えば、Razumov の裏切りの物語がその危機に達した時、語り手は読者の前にひとつの“key word”を提示するのだが、それは「ページを覆うあらゆる言葉の背後に存在し、真実そのものではないにせよ、あらゆる物語の目的であるべき道徳的発見を助けるのに十分な真実を内包する」ような、そういった言葉であるというのである。そして、Razumov の日記を入念に調べた後、語り手は“key word”が“cynicism”であるという。だが、そうした言葉は、自明、あるいは無関係な言葉でしかなかった。つまり、語り

手は真の“secret”のかわりに仮の“secret”を読者に提示し、彼と同様に頭の悪い読者たちを満足させる一方で、彼の替玉(“double”)は“soul”“eyes”“black and white”といった“secrets”や“key word”に携わっているというのである。(91)

さらに、彼は自分の話の進め方の拙いことや“digression”について言い訳したりもするが、こうしたこともやはり読者の目を“secrets”からそらす役割をはたしているといえる。

このように、Kermodeは、語り手をあくまで読者の間に介在するものとみなし、彼が物語全体にどのような効果を与え、読者に対しどのような役割をはたしているかという問題を論じているわけであるが、Millerは語り手のもっと別な特徴に焦点をあてている。

*Under Western Eyes*の年老いた語学教師に匹敵する*Lord Jim*の語り手は、Marlow船長である。最初の4章は全知であるが、第5章から第35章までは彼が仲間に向けて回想するという形式をとっており、さらに最後の10章は数年後その時の話を聞いていた友人の一人に宛てた手紙が紹介されることになる。故に、「この物語の視点」が「大部分マーローの注意深い凝視眼と怯むことのない関心を通して彼自身の回想と価値観によって」(佐藤156)語られているとするのは、誤りではないように思える。

事実、Millerの論にも一応Marlowという語り手を通して解釈を試みている部分がある。彼はまず*Lord Jim*のテーマについて語りつつ、従来の批評家たちの考え方を紹介していくのだが、その手始めとして、Marlowが何故Jimに関心をいだいたかについて説明している^{くだり}件を第5章から引用する。

Why I longed to go grubbing into the deplorable details of an occurrence which, after all, concerned me no more than as a member of an obscure body of men held together by a community of inglorious toil

and by fidelity to a certain standard of conduct, I can't explain. You may call it an unhealthy curiosity if you like; but I have a distinct notion I wished to find something. Perhaps, unconsciously, I hoped I would find that something, some profound and redeeming cause, some merciful explanation, some convincing shadow of an excuse. I see well enough now that I hoped for the impossible—for the laying of what is the most obstinate ghost of man's creation, of the uneasy doubt uprising like a mist, secret and gnawing like a worm, and more chilling than the certitude of death—the doubt of the sovereign power enthroned in a fixed standard of conduct. (ch. 5/Miller 27)

Jim は、「一点の染みもないほど清潔で頭の上から足の先まで純白の衣服を纏い、逞しい骨格でわずかに肩をかがめ、頭を前に突き出して突進してくる牡牛を連想させるような」(佐藤157) そういった風貌の持ち主であった。その彼が船と乗客を見捨てるという不名誉な行為を犯すわけであるが、Jim が “trustworthy” “perfect” に見えたが故に、彼が船を見捨てたことは Marlow にとって特に嘆わしいものとなる。そして、Jim の外観と彼の実像との間の矛盾は、Marlow に “the sovereign power enthroned in a fixed standard of conduct” を疑問視させることになる。(27)

だが、結局、Marlow の目的は何だったのだろうか。Miller は次のように述べる。

Marlow's aim (or Conrad's) seems clear: to find some explanation for Jim's action which will make it still possible to believe in the sovereign power. Many critics think that in the end Marlow (or Conrad) is satisfied, that even Jim is satisfied. The circumstances of Jim's death and his willingness to take responsibility for the death of Dain Waris . . . make up for all Jim has done before. Jim's end reenthroned the regal power justifying the fixed standard of conduct by which he condemns himself to death. (28)

ここまでが、最も一般的な従来の批評家たちの考え方であろうが、Miller は「事態はそれほど単純ではない」とさらに論を進めていく。そして Marlow が解釈を企てたことにはどこか疑わしい点があり、さらに彼がいくつかの矛盾したやり方で“sovereign power”への忠誠を維持しようとしていることを指摘した後、Jim のすべての災難の原因となっているのは、彼の“romanticism”，つまり英雄としての彼の子供じみた“image”であると述べる。(29)

ところで、この“romanticism”であるが、佐藤勉氏によれば、Marlow の友人である Stein が Jim を“romantic”と言明して以来、Jim の「性格はこの言葉の呪術を受けて他の性格的要素を退けている」(157)ということである。そうすると、この言葉は先程の *Under Western Eyes* における“cynicism”と非常に似通った効果を小説に与えていることになる。

ただし、Miller の場合、主眼点はそうした効果が読者に及ぼす影響にあるわけではないので、ここではその“romanticism”が Jim の災難の原因であるかもしれないという可能性を示すにとどまっている。彼はさらにこう述べている。

Perhaps it is Jim's confidence in this illusory image of himself which is the source of his inability to confront the truth about himself and about the universe. Perhaps this confidence even paradoxically explains his repeated acts of cowardice. It may be that Jim's death is no more than the last of such acts, his last failure to face the dark side of himself His death may be no more than his last attempt to act according to a fictional idea of heroic conduct. (29-30)

このように、“perhaps”を繰り返すことによって、Miller は彼がこの見解にも深くコミットしていないことを示しているように思われる。実際、Miller が真にこの論の中で述べたかったのは、小説のテーマが何であるか

といったことではなく、後で述べるように、小説における反復の作用の重要性であるわけであって、今までのところは、本題に入るための前置きのようなものである。

そこで、いよいよ、Miller の論点である反復の問題に入っていきたいと思うのだが、これまで述べてきた Marlow の視点を中心とした解釈は、この反復に焦点をあてた場合、この小説を構成する複数の視点からなる解釈のほんの一部（といっても比重はかなり大きい）でしかなくなる。故に、Miller にしてみれば、Marlow が “unreliable” な語り手であることは、Kermode にとってもそうであった程には障害にはならなかったのである。

反復を論じる際、Miller は、まるで Kermode の示した “mythos” “ethos” “dianoia” に対抗するかのごとく、自らが定めた小説の三つの構成原理 “temporal form”, “interpersonal relations”, “relations of fiction and reality” (31) を持ち出してきて、これらに従って論をすすめていくことを提案する。

まず、“interpersonal relations” から始めるのだが、Miller は、*Lord Jim* には語り手も含めて完全に信用できる視点は存在せず、小説は “interrelated minds” の複雑な意匠であり、どの “mind” をとっても、他者を判断するのに十分な “secure point of reference” にはなり得ないと言う。彼によれば、小説の最初と最後に現れる全知の語り手さえ、頼りにならないのであり、彼はすべてを取り囲み、おそらくすべてを理解しているのであろうが、読者が解釈する上で重要な手助けをしてはくれないのである。この全知の語り手の内側に、Marlow の語りが存在するわけである。彼は読者の代理であり、読者と彼の語りの間に存在する “almost silent listeners” に向かって、Jim についての物語を語る。“almost” である理由は、Miller も指摘するように、例えば、第 8 章において、“You are so subtle, Marlow.” と話を遮る場面があるからである。また、物語の多くは、Jim によって Marlow に語られており、その “self-interpretation” が Mar-

low によって解釈され、さらに Marlow の “listeners” によって解釈されるという多重構造になっている。さらに、Marlow の物語に登場する他のマイナーな人物たち—— Brierly 船長、フランス人中尉、Chester、Stein らの視点も、Marlow の物語の部分的な “sources” になっており、物語を判断するための “alternative ways” を提供する。(31-32)

一方、こうしたマイナーな人物たちの物語は、Jim の物語に対するアナロジーとなっているのだが、例えば、Jim の人生における重要なエピソードが、互いに “jump” という行為において反響しあうように、Brierly 船長の自殺もまた “jump” によるものであった。だが、Miller によれば、小説を構成する個々のエピソードの “sequence” には、起源、あるいは小説の “mythos” の第一の例となるエピソードは存在せず、それぞれが他のエピソードの反復であり、それぞれの例が他の例と同様に謎めいているという。(33-34)

こうしたエピソード間の関係は、“temporal structure” という点から見ても、同様に複雑であり、これらは “a pattern of eddying repetition” を創り上げるのだ。Miller は次のように述べる。

The novel is made up of recurrences in which each part of the story has already happened repeatedly when the reader first encounters it, either in someone's mind, or in someone's telling, or in the way it repeats other similar events in the same person's life or in the lives of others. The temporal structure of the novel is open. *Lord Jim* is a chain of repetitions, each event, referring back to others which it both explains and is explained by, while at the same time it prefigures those which will occur in the future. Each exists as part of an infinite regression and progression within which the narrative moves back and forth discontinuously across time seeking unsuccessfully some motionless point in its flow. (34)

ここには、Miller が序論で我々に示した “the contradictory intertwining of the two kinds of repetition” (4) の一例があらわされている。つまり、それぞれの “event” は、原型となる “grounded” な “event” ——ここでは “some motionless point” ——その原型を捜し求めながら、時間の中を前後に動き回るのだが、結局原型を見つけることはできず、“ungrounded” な永久運動の内にとりこまれてしまうのである。

また、Miller は “event” の集合を、時間的のみならず、空間的なイメージにおいても表現している。*Under Western Eyes* と同様、*Lord Jim* でも “event” の年代順がかなり乱されているのだが、時間的な進行よりも、ひとつのエピソードが別のエピソードの反復であることに読者の目を向けさせることによって、物語を “a simultaneous set of echoing episodes spread out spatially like village or mountain peaks on a map” (35) として現出させている。しかし、この空間の表層にも、隠された物語の意味が浮上してくることはなく、語り手や解釈者は起源を求めてその上を前後にさまようしかないのである。

このように、時間、空間における人物やエピソード群の反復のイメージや運動を示しながら、Miller は *Lord Jim* における明快な答の不在をも告げる。この答は、“historical sources” に戻ったからといって確認されるわけではなく、むしろそうしたドキュメントもまた謎にみちていることを暴露してしまうにすぎない。(36) さらに、小説の中に反復する “imagery” ——雲のすき間に見える Jim, 光と闇, 黒と白——といったものも、結局 “systematically ambiguous” であり、小説の起源とはなり得ないという。(37-38)

例えば、Miller は、Jim を光と闇に譬えた二つの “passage” を引用し、一方では Jim が暗闇を照らす光であり、他方では、突然影から現われ消えていった目の眩むような光に対しくっきりとその姿を現わした “blackness” であったことを示し、光と闇が互いに入れかわり、光が闇

の起源である時もあるれば、その逆の場合もあるというふうに述べる。また、これらの“passage”が、“anticipation”や“recollection”を通じて、他の“passage”を“refer”していることも十分あり得るわけであるが、結局、起源、すなわち他の“passage”が解釈されうる基盤となるものはないとされる。(38-99)

こうした回し送りの的な *Lord Jim* の特徴を、Miller は辞書に譬える。そこでは、一つの見出し語は、読者に別の言葉を参照させるが、その言葉もまた他の言葉を参照させ、そのうち最初の言葉に戻ってしまうという、“endless circling”が行われるのである。(39)

この堂々巡りが起きてしまう背景には、「言語全体が隠喩（事物の代わりに置き換えられた記号）」（ライアン38）であるという“deconstructive”な見解が働いているのかもしれない。堂々巡りを停止させるためには、絶対的な起源が必要となるが、そうした超越的なものを表わしうる「メタ隠喩的記述」などあり得ないというのが Derrida の考えである。言語で説明しようとするれば、その隠喩を説明するためにまた別の隠喩を使わざるを得ない。こうして、言語は「無限後退」の網の中に捕えられるのである。

Lord Jim において“endless”であるのは、物語のプロセス自体でもある。Marlow は読者ととともに、Jim の人生の詳細を繰り返し探りながら、決してそれを完全に理解することができないので、物語に“Finis”と書くことができないという。(39)ここで Miller は第21章から、Marlow の次のような言葉を引用する。

And besides, the last word is not said,—probably shall never be said. Are not our lives too short for that full utterance which through all our stammerings is of course our only and abiding intentions? . . . There is never time to say our last word—the last word of our love, or our desire, faith, remorse, submission, revolt.(39)

最後の言葉は語られない。だが、その言葉こそ、“the haunting shadow of fate” (ch 16/Miller 40) を払いのける効力をもつ言葉であったのだ。結局、Jim は、Marlow にとっても、Jim 自身にとっても、読者にとっても“clear”とはなり得なかった。そして、Miller によれば、我々にとって明白であるのは、Jim の物語を解釈するプロセスが、常に暗闇に隠れたままの光に向かっていく絶え間ない動きであるということである。

このように、Miller は反復の形式に言及しつつ、Conrad の *Lord Jim* を解釈してきたわけであるが、彼は同時に小説の根源的意味の解明の不可能性をも説いている。また、*Lord Jim* においても、*Under Western Eyes* と同様、“black”と“white”といった“imagery”が散りばめられているが、Miller はこうした“imagery”が何らかの根源的意味を有するとは考えず、光と闇の“imagery”と同一視し、反復の連鎖のうちに取りこんだ。

一方、Kermode は、物語の一般的“plot”と直接関係がないため、単なる「触媒」あるいは「衛星」(89)にすぎないと考えられている“secrets”が、実は独自の結びつきを形成し、コンセンサスに訴えるというよりむしろ解釈を連続性のない隠された方向へ導くことを述べ、そうした“secrets”が潜む“misty world”においては、その関係は、ある認められたシステムによって定められるのではなく、神秘の謎につつまれたままであると主張する。(89)すなわち、Kermode もまた、“secrets”の創り出す世界があいまいであることを認めているのだが、あいまいで“phantom”に満ちあふれながらも、独自の“plot”を形成するというのである。

ここで、Kermode は、ロシアに関する空白のページが、この“secrets”の“plot”の一部をなし、このことは、“blackness”と“whiteness”，紙とインク、雪と影——そして、“writing”自体に関するおびただしい数の暗示と関連づけて考えれば明白であろうと述べているのだが、これはどう解釈すべきであろうか。この小説には、Conrad によって書かれなかった部分、空白の部分が存在するということを言っているのであろうか。Ker-

mode は結局、自分では“secrets”の意味が何であるか語っていない。彼はただ次のように述べるのみである。

It is not an easy thing to talk about such a constellation of irrational figures [souls, spirits, phantoms, ghosts, ghouls, eyes, black and white, and so on], but it must somehow be done if we are to read secrets as well as sequence—to avoid attributing all these phenomena to Razumov’s “nervous exhaustion.” (93)

おそらく、彼の言う通り、“secrets”の正体を解明するのは容易なことではないであろう。また、“secrets”に限らず、小説全体に関する完全な解釈を達成することも不可能に近いように思われる。Kermode は、論の最初の方で、解釈者の二種類の態度について語っているが、それによると、一方は、“authentic”なものを再建しようとして路頭に迷い、他方は、小説の性質が“open”——つまり、解釈による看破に対し“open”であると結論づけるといふ。(82)言い換えれば、“authentic”な解釈が不可能である反面、そうでない解釈は無限にあるということになる。これは、Miller の見解とほぼ同一であるが、Miller はあくまでも解釈はテキストによって制限されるということを強調している。

以上、Miller と Kermode という現代の批評界を担う二人の批評家の見解やその批評法について、Joseph Conrad の作品を通して、比較し論じてきた。Miller の方は、周知の通り、文学における“deconstruction”の実践者であり、彼の *Lord Jim* 論にもその特徴が十分にあらわされている。

例えば、彼自身序論において述べている通り、矛盾した二つの反復の形式が同時に存在するという事実は、テキストの“heterogeneity”（異質性）をあらわすものであるが、こうした異質性は小説や哲学のテキストにおける“deconstruction”の実用原理である。Barbara Johnson によれば、次のようになるということだ。

Instead of a simple “either/or” structure, deconstruction attempts to elaborate a discourse that says neither “either/or” nor “both/and” nor even “neither/nor,” while at the same time not totally abandoning these logics either. The very word “deconstruction” is meant to undermine the either/or logic of the opposition “construction/destruction.” (Miller 17)

そして、この“alogic”あるいは“other logic”の例が、Millerのいう二種類の反復の関係なのである。

また、Michael Ryanによれば、“deconstruction”を非常に広い意味から言えば、「形而上学批判からなる営為」(16)ということになる。形而上学は、「対立を組織し優先順位を決める」ことによって、「自らに根拠を与える価値を惑わすものを抑圧する」のであるが、それに対する“deconstruction”の「営為とは、根拠づけを行なう根源的な概念に対して形而上学が二次的・派生的だとして排除するもの——例えば同一性に対する差異——の方が、実は、形而上学がいう原初的なものよりどれほど根本的であり一般的であるかを明らかにすることによって、対立と優先権からなる形而上学の体系をひっくり返すことである。」(18)

Millerが解釈の方法として我々に示した反復も、今述べた二次的な概念に属している。故に、上記の論に従えば、差異と同様、反復もまた一般的に原初的だとみなされているものよりも根本的であると考えられるのだが、さらに「すべての記号一般が根源的に反復的な構造をもつ」(Derrida 108)というのは、“deconstruction”における大前提でもある。再びRyanのDerrida論から引用すると、「そもそも機能するためには、言語行為は、予め確立しているコードや慣習や反復可能なモデルからの引用であることを認めなくてはならないし、初めから、他の場所において、他のコンテクストにおいて反復しうるものでなくてはならない。」(58)だが、どんな言語

もすでに何かの引用であり、しかも他のコンテクストに引用され反復されうる可能性を常に内蔵しているとすれば、言語のうちに起源を見出そうとすることが不可能であることは始めから明らかなのではないだろうか。

しかし、Miller と Kermode が、それぞれの論において焦点をあてていたのは、まさにこうした性質を内蔵する言葉であった。そして、明晰さや一貫性を求めるが故、小説の中の“secrets”や謎に包まれた部分を切り捨てる読者の傾向に対し警告を与えたのが Kermode であるとするれば、文体やレトリックに注目することによって、“nonverbal reality”に目を向けがちであった従来の批評から離れ、新しい批評を試みたのは Miller であるといえよう。だが、結局 Kermode 自身は“secrets”の解釈までは試みていないし、Miller の結論はといえば矛盾と解釈の決定不可能性から成り立っているのだ。こうした結果に、作家の Joseph Conrad のあいまい性も一役買っているだろうことは否定できないが、二人の批評家がともにその重要性に注目し、真摯な態度で分析を試みたであろう言葉の性質そのものに、唯一絶体の解釈を拒む何か潜んでいるのではないかと考えずにはいられないのである。

参考文献

- Conrad, Joseph. *Lord Jim*. London: Dent, 1961 ed.
Conrad, Joseph. *Under Western Eyes*. London: Dent, 1963 ed.
Kermode, Frank. “Secrets and Narrative Sequence.” *On Narrative*. Ed. W.J.T. Mitchell. Chicago: U. of Chicago P, 1981. 79-98.
Miller, J. Hillis. *Fiction and Repetition*. Cambridge: Harvard UP, 1982.
- * * *
- 佐藤勉 『コンラッドの小説—人間存在の探究の軌跡—』高文堂新書, 1976。
ジャック・デリダ 『声と現象』高橋允昭訳, 理想社, 1970。Jacques Derrida. *La voix et le phénomène*. Presses Universitaires de France, 1967。
マイケル・ライアン 『デリダとマルクス』今村仁司他訳, 勁草書房, 1985。
Michael Ryan. *Marxism and Deconstruction*. Johns Hopkins UP, 1982.